

ウェブ上の叙述と道徳の場

ウェード.L. ロビソン

出典：

W.L.Robison, "Web Predicates and Moral Space" in *Proceedings for Computer Ethics: Philosophical Enquiry (CEPE2000)*, 2000, pp.221-231.

キーワード：

(アイデンティティの) 流用 (appropriation)、偽りのライト (false light)、ライプニッツ (Leibniz)、道徳の場 (moral space)、プライバシー (privacy)、ウェブ上の叙述 (web predicates)

この論文は、2000年にダートマス大学で開かれた Computer Ethics: Philosophical Enquiry (CEPE2000)の予稿集に載せられたもので、インターネットの導入によってプライバシー侵害行為の境界が変化し、拡大していくことについて述べられている。

筆者のウェード.L. ロビソンは、ロチェスター工科大学の応用倫理学の教授で、専門はヒューム研究、法哲学、実践倫理学、職業倫理学など。

イントロダクション

「Y2K」という小説（もしくは映画）から、狡猾なハッカーの手にかかって人生を粉々に破壊されてしまった夫婦、エリオット夫妻の例がまず紹介される。ハッカーは彼らのパスワードを破り、彼らに夫はチャイルド・ポルノグラファー、妻はポルノ女優という全く別のプロフィールを与えた。それは巧妙なもので、夫はその偽のプロフィールを信じた FBI に尋問されもした。

ハッカーはエリオット夫妻の人生物語 (the narratives of their lives) を支配し、彼らの人生に取り返しのつかないほど変えてしまったのである。たった一人のハッカーによって彼らの人生は、個人としても夫婦としても粉々に破壊された。

これは極端にドラマティックなフィクションではあるが、これに類似したことが起こる危険性は、インターネットの発達によって増加していると著者は主張する。私たちは仕事や個人的な通信でインターネットを使用することでウェブのなかに自分自身を編み込んでいる。私たちの人生物語は、かなりの部分がウェブ上に生成された叙述で編み上げられるようになってきているし、そのウェブもまた複雑に絡み合った叙述から成っている。

私たちは、二つの伝統的なプライバシー侵害行為の、ひどく邪悪な混合物に、無防備にさらされているのである。その二つとはなにか？——偽りのライト (false light) とアイデンティティの流用 (appropriation) であると著者は言う。

エリオット夫妻はその両方の餌食になった。彼らは偽りのライトに包まれ、チャイルド・ポルノグラファー、ポルノスターという身に憶えのない新しいプロフィールを与えられ、彼らのこの二次的な、後付けされた人生物語をほとんどコントロールできなかった。彼らの人生は、ハッカーによってハイジャックされ、流用されたのである。

アイデンティティの流用と偽りのライトは、一見、その全く異なった意味内容によってプライバシー侵害と明確に区別される。

アイデンティティの流用のありふれた例は、ある人物のアイデンティティのいくつかの特徴(名前や顔など)の使用である。肖像や写真の広告利用などがこれにあたる。このアイデンティティの流用は一見、プライバシー侵害とはほとんど関係ない財産権の問題であるように思われる。が、これはひとの公的なペルソナを勝手に使うことなのである。

偽りのライトの本質的な要素は、誰かにそのひとの個人的な生活に関する何かしらの誤った属性を賦与することである。

著者はここでニクソン大統領のセックススキャンダルを例として挙げる。ニクソン大統領には、1962年にカリフォルニアの知事選に落選してから、二度と再び妻とセックスしなかったという噂があった。これは一見プライバシー侵害行為とはほとんど関係ないように思われるが、この噂が誤りであるなら、これは立派にプライバシー侵害行為である。これは誰かのプライベート・ライフについて、何が真実であるのかを明らかにすることに失敗しているので、偽りのライトであると言える。

巧みな嘘は、ひとの個人的な事柄の公的な告白にたいして邪悪な力を及ぼすことができる。ニクソン夫妻は濡れ衣を主張することもできたし、実際彼らはそのようにした。あるいは彼らは、実際 1962年以降もセックスしていると告白することもできた。しかし「ニクソン=妻とセックスしていない」というイメージを抱く人々が現実に存在するという、疑惑の後遺症は、巧妙に選択された嘘の力を証明している。

このような(おそらく)誤った属性賦与は、ニクソン夫妻にはほとんど害は及ぼさなかったが、巧妙にデザインされた嘘の数々はときに言葉に出せないほどのダメージを与える。とりわけ、それらが私たちの人生の既に織られた織物に編み込まれた場合は。エリオット夫妻に起こったことがそれである。ハッカーはエリオット夫妻のプライベート・ライフに対して、彼らの全人生における役柄を変えてしまうような、彼らが再び彼らの人生を支配することが出来ないほどの影響を残す、いわばひとつのメタ物語を作りだしたのである。このような場合告白は役に立たない。告白することなど何もないからである。またいったん賦与されてしまった属性を取り去ることもできない。なぜなら FBIのエージェントたちがそうしたように、他の人間はそれに基づいて行動するからだ。

この二つのプライバシー侵害を容易にさせたのはインターネットの存在である。著者はインターネットのなにかがこのような行為を容易にしているのか、またもしこの種の害が伝統的なプライバシーの侵害にともかくも組み入れられるならば、それがどうやってなされるかということを見ようとする。

もし私たちが、自分自身を、ひとつの道徳の場(moral space)を占めるもの、私たちがいったい誰なのかということ定義する一連の道徳的關係のなかに位置を占めるものとして考えるなら、という仮定のもとで、筆者は次のような問いを投げかける。道徳の場のなかの私の場所は、私たちの人生の新しいメタ物語を創造する偽りのウェブ上の書き込みによってどうやって変えられるのだろうか。

ライブニッツを有効に使う

情報時代においては、私たちが自分自身をライブニッツが私たちを見たように見ること、すなわち、叙述の一本の糸として、デジタルなモナドとして見ることは有用であると筆者は主張する。

ライブニッツは一人の人物(a person)を、現実実在するなにものかであり、叙述線によってその個体の存在の真実が規定されたものであると考える。個体はその個体の独自の時に存在し、独自の時に死ぬ。個体がそ自分が誰であるかを構成するということだけが真実である。もし叙述の一つが変わったら、それがどんな些細なものであっても、その個体は違うなにかになる。ライブニッツによると、ひとつの可能世界は、一連の叙述によって現され、そのことがこの可能宇宙が真実であることを決定する。

ライブニッツの概念が与えたテーゼから導き出されるのは次のようなものである。

- ・ひとりの人間を構成する叙述は、その叙述に統一性を与えるようなひとつの物語によって結びつけられたものである。一つの叙述は他の叙述に流れ込む。もし私たちが誰かについて彼・彼女はこれこれこういう人であると言えるなら、そのとき、私たちは私たちにその人の理解を与えてくれるようなワンセットの叙述全体からひきだせる「これこれ」の叙述を列挙できる。

- ・これらの叙述のセットは私たちの人生のあらゆる叙述を含むがゆえに（そしておそらく私たちに関連し私たちに先立つあらゆる叙述、私たちが私たちにならって私たちについて保証するあらゆる叙述を含むがゆえに）、一つの人生を筋の通ったものにするために、多くの方法で、ほかの人物の叙述のセットから引き出される多くの物語が存在する。

- ・私たちは個人的な叙述の多くをコントロールしている。それは「誕生日はいつか」のようなものではなく、例えば今私たちが珈琲を飲もうとしているかいないか、というような叙述である。

私たちは関係の蜘蛛の巣/ウェブの中央に身を落ち着けている。様々な種類の関係を通じて、関係を持っている多くの人々、多くの存在と共に存在している。

これらの関係のなかに、私たちがお互いに対して負う道徳的關係がある。私たちは私たちが抱えている道徳的關係の全種類のカatalogを必要としているわけではないが、しかし、道徳的關係は公認されたものだけではなく、ほかの人々への道徳的關係も負っている。

関係というものは世界に住む人の数だけある。

このように、私たちは誰もが道徳的關係の複雑な蜘蛛の巣/ウェブの中心にいる。これが道徳の場(moral space)であり、いわば、私たちが占めている場所である。私たちはこの場のなかに独自の場所を持っている。そして、この場所は単に私たちすべてのの間に、そして私たちすべてと道徳的立場をとりうるすべての存在の間に存在する（あるいは存在すべき）一連の道徳的關係である。（少なくとも私たちの道徳的關係に関する限り）私たちが道徳的に構成するこのような関係の蜘蛛の巣において、孤立するものは誰もいない。

しかし私たちそれぞれが持っている一連の道徳的關係は独自のものである。私はある道徳の場にいるし、あなたは別の道徳の場にいる。そして私は私たちが道徳の場のなかの違う道徳の場にいることを知っている。なぜなら私の中にあるような道徳的關係はあなたがその中にある道

徳的関係とは異なっているからだ。少なくとも、あなたが主体であり、私が客体であるような道徳的関係の範囲では。それは逆もまた同じである。ライブニッツがアイデンティティ混乱の主犯に関して主張したように、(少なくとも私たちの道徳的関係に関する限り) 私たちは同一の道徳的関係を共有しており、道徳的に同一のものとされている。

このような関係において、私たちのウェブの使用が増加していることの意味と、私がサイトからサイトへとたやすく移動できるウェブ上の叙述(web predicates)の滑りやすい性質と呼んでいるものの意味が探求される。ウェブ上の叙述の滑りやすい性質は、私たちの自分自身を道徳的な個体として理解することを危険にさらす。

ウェブ上の叙述のコントロールの喪失

前章で筆者が述べたようなライブニッツの考え方の問題点は、この世界を、あらゆる可能世界の中から神によって選ばれた最善のものである、とするところにある。ここに「ウェブ上の叙述の滑りやすさ」と筆者が呼んだものへのヒントがある。

ライブニッツが神と呼んだ「第三者(stranger)」がウェブ上には存在しうる。神がすべてを見通すように、この第三者も、およそ普通の人々には知りうるとは思えないようなことを知るような位置にいる。このような第三者は、神のような視点をとることによって、私たちの人生物語に普通より簡単に叙述を加えることができる。

「私たちの人生物語」というメタファーは、まるで私たちがその物語の作者であるか、少なくとも重要な構成要素であるかのように思わせる。ライブニッツの世界が一見そうであるように、私たちは私たちが何をするかの多くをコントロールしているように感じている。私たちが自分をコントロールしていると考える誘惑は自然なものだ。しかし「Y 2 K」の教訓は、あなたのパスワードを盗めるような第三者はあなたの人生物語を作り変える力を得るということである。ハッカーは神になる——あなたのアイデンティティに手を加えたり、削ったりする手際の手際がよいやり口で、あなたにハッカーが予見した通りの大破滅をもたらすことができるような第三者になる。

第二に、この第三者は私たちが何をしたかを知っている。そして、私たちが暴露されたくないと思っていた私たちの人生物語の叙述に精通している。それはその誰かに私の人生を洞察することを許すということだ。自分の情報が漏れてしまうということは、私たちを不安な気持ちにさせる。プライバシーを私たちについての情報のコントロールとして考えるべきであるというチャールズ・フリードの見方が支持されるだろう。インターネット上でのプライバシーの侵害への不安の特徴は、例えば、私たちの会話を盗み聞くことにや、私たちの許可なく、電子メールを読むことによって、他人が私非公開の私たちについての情報に内々に関与するようになることである。

これらの二つの問題はウェブ上では珍しいものではないが、ウェブの存在によってより悪くなるものでもある。ウェブの本質として、私たちは自分たちが論理や筋道を段階を追っているのではなく、情報から情報へジャンプしているように感じるというものがある。感覚には、論理や筋道のような真実へのガイドがない。ここで、私たちについてなにかを知っている第三者が私たちをどうやって変えることができるのかということが明らかになる。私がどこまで自分の叙述をコントロール下においているのかということも「私がどう感じるか」という叙述であり、その変化を感じ取ることは難しい。私の人生物語は(ウェブによって) そのように影響を受けている。もし、私たちの人生物語が「Y 2 K」で描かれたようなメタ物語にすっかり覆われてしまったとき

には、私たちに選択する力はほとんどなくなるだろうと筆者は予測している。

私たちの道徳の叙述を変えること

私たちの人生の叙述のなかで、他者が変えることが出来るものは、私たちの道徳的叙述である。私たちの人生物語のウェブ上の記述を書き加えたり削ったりすることによって、私たちのアイデンティティは乗っ取られ、それは私たちの人生を変える。

「Y2K」に出てくるようなハッカーにとって、誰かをチャイルド・ポルノグラファーに仕立て上げることによって、その人の人生を変えることは、いくつかの叙述をその人の人生のその他の部分は手つかずの物語へと加えるだけのことではない。その人の人生物語全体の再読込を要求すること、その人が今まで何をしてきたか、その人の人生の過去の叙述への再考慮をその人の知人にまで要求することである。行動は監視され、未来の叙述は検査され、人と人との関係も変えられてしまう。例えば、「Y2K」のエリオット氏はもともと「子供の扱いがうまい」人であったが、ここに彼が「チャイルド・ポルノグラファーである」という叙述が加えられたとき、彼の友人たちには、過去にまで遡っての彼の行為の再解釈が要求されるだろう。

このような変化は、ひとの自己理解さえも変化させる。私たちは自分自身の自己理解を再評価し、今まで私たちが自分をこういうものだと考えてきた者とは違う、「私たちがなんであるか」を再発見することになるだろう。このような人は自分がなんであるかを考えるという種の間であることができるようになる。その際に、自分自身について、あるいは私にとって何が真実であるかについての不幸な真実を発見するかもしれない。他の人々との道徳的関係が変えられるのみならず、自分自身についての道徳的理解も変化するだろう。自分の道徳性について疑うという関係を（自分との）道徳的関係として認めがたいような、そういう道徳的関係のなかにいる場合、そのような自分への疑いを持たないことは困難である。

しかし、自分自身の道徳の場を構成する一連の道徳的関係は、自分自身についての情報を集める他者によっても変化させられる。自分自身を構成する一連の叙述は、それらの叙述の書き加えによって変化させられる。加えられた叙述のいくつかは、疑いもなく些細なことである。が、例えば自分が人に知られたくないことをしているときに、誰であろうと自分が決して自分の生活の中に踏み込んで欲しくないような方法で、自分の生活にのぞき魔が進入してきた場合などは「些細なこと」では済まない。もし私が……と筆者は言う。もし私が、習慣的に、私の母親が「薄汚いビデオ」と呼ぶものを借りることにしていたとする。私はそれを自宅でこっそり見る。そのことを知るものは誰もいない。そのとき、のぞき魔が、私がほかの人間には知って欲しくないなにかを知ろうとしたとする。ここでのぞき魔が知っていることは、誰かが私や私の道徳性について理解しようとするときの主要な色眼鏡のようなものである。私はその手の下劣なフィルムと考えられているものを見ることから楽しみを得るたぐいの人間であると思われるだろう、と。

このような知識が、私たちの、一人の人間の理解にどのように影響を及ぼすかを考えることは、ニクソン大統領をはじめとした政治家の様々なスキャンダルによる失墜の例を見てみればよくわかる。

このように、他者による、私たちが何をするのか、何をかうのか、医者や精神科医に診てもらうことが必要などんな身体上の、精神上の問題を抱えているのか、などなどについての情報の収集は、私たちの道徳的記述を変化させるだろう。

道徳的な場と（アイデンティティの）流用

もし私たちが自分をライブニッツが言ったように一本の紐のかたちをした叙述 (predicates) のようなものであると想定するなら、私たちは各々が他の人々やその他道徳的立場をとりうる存在に対する道徳的な関係を述べる叙述の場のなかに自分独自の道徳の場(a unique moral place) というものを持っているものとして考えられる。

インターネットの出現とその利用の増加に伴い、私たちの叙述はよりほかの人々の読解や悪用に対して開かれたものとなっている。ライブニッツのいう神のように、私たちの一般に公開されていない叙述に内々に関与することができる人々もいる。例えばハッカーは、叙述を書き加えたり、削除したりすることによって私たちの叙述の糸を変えてしまうことができる。私たちがハッカーの能力を持っていれば、自分自身をもっと公的に役にたつ人間に書き換えることもできる。しかしこれは私たちの叙述の正しい変化ではない。これはハイジャックであり、私たちのアイデンティティの流用である。

私たちが普通どうやって他の人をアイデンティファイしているか考えてみよう、と筆者は言う。私は私である。1つの人格を持ち、1つの精神と1つの身体を持っている。ストローソンは個体を個体として叙述するための基盤を身体に置くが、筆者はそうしない。サイバースペースでは身体という基盤は存在しないからである。そこではどうやってアイデンティフィケーションを行うのだろうか。現在のところアイデンティティの照合（身元の照合）はほぼパスワードで行っているが、パスワードはコードであり、コード操作の達人によって簡単に書き換えられてしまう。巧妙で思い切りのいいハッカーにかかれば、私たちのウェブ上の叙述はめちゃくちゃにされてしまう。巧くすれば、私たちについて述べられた真実でさえ、私たちの人生全体を包み込む、新しいメタ物語を投射する光のなかで配役しなおしてしまえる。

エリオット夫妻のように、私たちは偽りのライト (false light) のなかで悪質なキャスティングをされ新しいアイデンティティを与えられることもある。このアイデンティティはインターネットの使用を通じてそれ以前よりもずっとパブリックなものになった。このように、私たちは、偽りのライトの中で、アイデンティティが流用されるといふ、プライバシーの侵害行為の境界を拡大し、破壊するような新たな害にさらされているのである。

最後に、このようなアイデンティティの危機の状況がいくつか挙げられている。

私たちは自分が自分自身が作ったのではない問題のなかに巻き込まれていることを発見することに何の疑いも抱かない（例：子供の虐待）。誰かが作った問題には、何らかの形で私たちが含まれているのである。例えば、傍観者もそうである。私たちの道徳の場は私たちがなにもしてなくても変えられることがあるし、私たちは今もなお、自分が引き起こしたのではない問題に頭を悩ませている。ここのような状況で「私はなにをすべきだろうか？」という問いに答えることは簡単ではない。

同様に、第三者による私たちのウェブ上の叙述の変更に、私たちが自分で作ったものは必要ではない。もし誰かが私たちの叙述を変えようとするならば、私たちは新しい道徳の場において混乱させられる。道徳的な関係の世界の中の私たちの場所は、特別な失敗は何もしていないにもかかわらず、私たちの感覚が危険にさらされているような世界に変えられてしまっているのである。

(武雄 露)